私が気づいたこと・学んだこと・変わったこと
～子どもとの出会いや学ぶ機会を通して～

私が壁を作っていたことに気が付きました。

中千代穂香さん
(大学生)

私は、子どもの頃から小学校の先生になりたいという夢があり、教育学部で学んでいます。大学の授業で外国につながる子どもたちのことを知り、津市が行っている大学見学ツアー※1や就業前日本語教室「つむぎ」※2などに参加しました。そこで、外国につながる人との間に壁をつくっていた自分に気が付きました。

外国につながる子どもたちと関わるのが不安だった私

大学見学ツアーに参加し、外国につながる子どもたちと直接関わるまでは、「言葉が通じなかったらどうしよう」「文化の違う子どもたちに、私が良かれと思ってやったことが嫌だって思われたらどうしよう」という不安がありました。

私のグループになった子どもたちの中には、日本語がほとんど分からない子から、ある程度日本語で会話ができる子までいて、私はどんな風に声をかけたらいいのかと考え込んでしまいました。けれど、実際に子どもたちと同じものを見て楽しんだり、普段の学校の話をしたりする時間の中で、少しずつ打ち解け、私の方が感じていた壁が少しずつなくなっていきました。

就学前日本語教室「つむぎ」では、子どもたちも保護者も、最初は不安で落ち着かない様子でしたし、私も「何をしたらいいんだろう？」と不安に思いながら、子どもたちの隣に行って「上手にできたね」など、声をかけていました。

何回目かの授業の時、数字のカードを並べていた子どもが、「できた！見て」と嬉しそうに私に見せてくれました。後ろから見ていた保護者もとても嬉しそうでした。そして、休み時間になると「一緒に折り紙しよ」と私を誘ってくれたんです。その子の笑顔や保護者の安心した顔を見て、私の不安もなくなっていきました。

壁をつくっていたのは私だった

私は、直接子どもたちと関わる中で、母語が違う子ども同士が楽しそうに遊んでいる様子を見たり、言葉が分からなくても子どもたちと同じ空間で楽しくやり取りしたりすることを通して、「言葉が通じない」「文化が違う」と先入観で壁をつくり、外国につながる人との関わりを避けていた自分に気が付きました。そのことに気付いてから、普段の生活の中でも、一緒に授業を受ける留学生とグループになって活動することや、アルバイト先で外国につながる人に話しかけることなど、以前は避けていたことを自分からやってみようと思うようになりました。

これから出会う子どもたちにも、自分から関わりを持ち、信頼し合える関係をつくっていきたいと思います。

※1　外国につながる中学生が日本の大学を見学し、大学を知ることを通して、進路に対する意識を高めるための取り組み
※2　就学前の外国につながる幼児が、戸惑うことなく小学校生活に適応できるよう、日本の学校で行われる授業や活動を体験する取り組み